

## 首脳外交を終えて

### 総理訪欧・訪ソの意義

先般、田中総理にお供しまして、ヨーロッパ、ソ連等を回ってまいりましたので、感じましたことをご報告させていただきたいと思えます。

まず、この時期に総理の訪欧、訪ソを企画いたしましたのはどういうわけか、というところでございます。これは格別意味があつたわけではないのであります。ヨーロッパとの貿易も顕著な伸びを示しておりますし、人の交流もアメリカよりヨーロッパ向けがずっと多うございます。ＥＣは一月一日に拡大ＥＣになりましたし、池田総理が行かれてもう十一年も経過しているわけでございます。このあたりでヨーロッパに向けて総理に腰をあげていただいて差支えないのじゃないか、

またそういう必要があるのではなからうかと判断したためでございます。

訪ソの方は、鳩山総理が行かれて十七年。その間、日ソ間の互恵の關係は、われわれが當時予想していたしたよりは順調な足取りで発展してきております。經濟協力も、小型のものはぼつぼつまっているわけでございますので、この際、両最高首腦の接觸を持っていたくことが自然なことでもあり、必要なことではなからうか。もちろんこの訪ソによりまして、もろもろの懸案について画期的な展開があるという幻想は持つていなかったわけでございますが、今日は正に総理に對し訪ソをお願いする時期ではなからうかと判断いたしましたのでございます。

総理に對する各国の接遇ぶりでございますが、私が見ますところ、最高級のものであったと思っております。

イギリスにおきましては、チェカーズという総理の別邸に招かれたのでございます。四百年も前に建ちました古い建物で、ある実業家の所有になっておりましたが、その方に子供さんがなかったので、自分の屋敷全体をイギリスの総理の静養すべき別邸として提供された所ださうです。ロイド・ジョージとか、チェンバレン等はいへんこの別荘を愛好されていたようでございます。ドイツにおきましては、ギムネットヒという所にある、これもまた総理の別邸を提供されたのでございます。ソ連におきましては、クレムリンに直接投宿の光栄に浴したわけでございます。

そしてしかも、最高首脳が終始つきつきりで接遇していただいたばかりでなく、予定の会談を延ばす、あるいはもう一度会談したいというたいへん熱心な応待ぶり、田中総理もたいへんご満悦でございました。

### 取り上げられた諸問題

#### (1) 日本のアジア政策

取り上げられました問題でございますが、第一は、わが方から日本のアジア政策につきあらまし説明をいたしましたのでございます。朝鮮半島の問題、中国との国交正常化後の一年の経過、インドシナ半島に対するわが方の態度等。ヨーロッパ側はそういったわが方の説明にはまったく異論のないところで、英独仏とも完全に日本側の政策はよく理解できる、自分たちの政策と基調を一にするものであるという応答でございました。ソ連との間におきましては、朝鮮半島とインドシナ半島に若干ふれましたけれども、先方も、こちらも、中国の問題には一切ふれなかったのでございます。

#### (2) 日本の外交・経済政策

また、当方から、日本の外交政策、経済政策の大綱を説明いたしました。日本が平和外交を基調にして、やっていること、やっていないこと、それから経済政策といたしましては自由化の方向に大胆に歩武を進めており、資本の自由化もほぼ一〇〇パーセント達成し、世間並みの市場の開放もやり遂げたことを説明いたしました。これに對しまして、各国とも高い評価をいただいたと思うのであります。

(3) 日本の資源政策

日本の資源政策につきましては、とりわけヨーロッパはわが国と立場を同じくする国々であるのでよく理解していただいたと思います。すなわち日本は増大するエネルギー、その他の資源をどのようにして確保しようとしているか、それに対して各国の理解と協力を求めなければならぬ立場にあるということをお話をいたしましたわけでございます。

とりわけ田中総理は、ヨーロッパと日本は、第三地域において資源開発を共同してやろう、そして手に入れることができたプロダクトは、日本により近いものは日本で、ヨーロッパに近いものはヨーロッパでそれぞれ使うという、いわゆる「田中スワップ構想」というものを大胆に提示したのでございます。ヨーロッパ各国も、プリンシプルとしてはよく理解できるが、現実にとどのようにして実現していくかということについては、いろいろな困難もあるうから、業界レベル、

あるいは政府レベルでもっと詰めようじゃないかということでもございました。

(4) 貿易・通貨問題

ヨーロッパで共通の問題としましては、まず貿易問題。この点については、ちょうど幸いにわれわれが発前にガットの閣僚会議が東京で開かれまして、いわゆる東京宣言が満場一致で採択になったのでございます。これを軸にいたしまして、この秋から始まるネゴシエーションを精力的にやって、成功させようじゃないかという点については、完全に意見の一致をみたわけでございます。

通貨の問題につきましては、ちょうど時を同じくいたしましてナイロビでIMFの総会が持たれたわけでございます。そこでは、日本を含んで五カ国の蔵相が集まりましていろいろ苦心いたしました結果、来年七月までにマネタリー・リフォームのドラフトを作ろうということまでこぎつけ得たことを各国とも非常に高く評価をしております。そして、それはわれわれの名譽にかけてもやり遂げなければならぬ大事業であるということとで、これまた異存はありませんでした。

## ヨーロッパの動き

### (1) 世界的な大経済圏 E C

そこで、そういう過程の中で、若干気がきましたことをご報告させていただきます。まず第一に、私は、E C というものについて、もう一度見直さなければならぬのではないかとこの感を深くしたのでございます。E C は今年の一月で拡大 E C となり、九カ国になったわけでございます。しかし E C 問題というのは、この九カ国だけの問題ではないということをまず考えなければならぬと思います。E C に現実に加盟していないフィンランド、スウェーデン、ノルウェー、南の方はトルコ、ギリシャ、オーストリー、スイス、スペイン、ポルトガルというような欧州圏の国々は、政治的な理由がありまして E C に直ちに加盟することはできないにいたしましたも、もはや E C とユニホームな経済政策をとってまいらなないとやっていけなくなっているわけでございます。E C 問題というのは、ヨーロッパ全体の問題ではないかというふうに考えておかなければならないと思われたのでございます。のみならず、地中海沿岸諸国から北アフリカの国々が、

EECとの特惠関係、逆特惠関係、その他の関係を通じまして、非常に特異な関係にございます。いわば、EECを媒体といたしまして、これらの国々が国際経済の循環の中に組み込まれてしまっていると思なければならぬと思うのでございます。

だとすると、九カ国で作っているEECは、すでに世界貿易の四割のシェアを持っている大経済圏で、その周辺の国々を考へてみると、世界経済の大半を握っているところの経済圏である。そういう頭でEECとの付合いを考へなければならぬと思います。

(2) ヨーロッパ連邦への胎動

ところが、このEECというのは、経済的な利害から成り立っているのかと申しますと、そうばかりでもございません。なるほどEECは統一関税政策、あるいは統一農業政策等から出発してきましたが、最近ではコンコルドの開発について英仏が協力している、あるいは英独蘭三国が協力して遠心分離方式による濃縮ウランの技術開発をやっている。このように技術が大型化してまいりましたので、一国だけでやり切れなくなり、より大きな土台でやる必要が生じたために、EECがそういう角度から見直される時代がきたといえる。その意味でもEECは政治性を持ってきたとみなければならぬように思うのであります。

またEECは、この七〇年代の末までには統一通貨を作るといっております。もっともブランド

首相によると、「これは必ずしもシングル・カレンシイを意味しない。各国がそれぞれの通貨を出してよろしいが、その各国通貨の間の交換レートは、ちゃんとフィックストされ安定したものでなければならぬ。そういうふうにちゃんとするんだ。そして、その向こうには、いわゆるヨーロッパ連邦という考え方があるのだ。あたかも自分の国はいま、西ドイツ共和国連邦といってそれぞれの州政府から成り立っていて、自分はその連邦政府を担当している。そのようにやがてヨーロッパ全体が連邦のようになる。それはもう手の届くところにきている、自分の眼の黒いちにぎつとそうなりますよ」と言っているわけでございます。そういう意味で、ヨーロッパというところは、非常な大きな転換期を迎えてきているという感を深くするのであります。

ただし、各国としても E.C. に向けた期待は、今日までの経過において十分満たされていないことをよく知っているわけでございます。しかもはやわれわれは「帰らない河」に竿さしてしまつた。そういうことで、E.C. としてはヨーロッパの問題をまとめ上げて、アメリカに対して、日本に対しても、その他開発途上国に対しても、当たらなければならぬ、そういう姿勢でいるわけでございます。

戦争を知らない若者は、国境を国境とも思わないで、ヨーロッパを縦横に往き来しております。恋愛もし、結婚もし、言語の障害もだんだん薄らいでできているということでございます。もはや

ヨーロッパ連邦というような問題は遠い手の届かない星ではなくて、手の届くところにきているというように感じられるわけでございます。

(3) 自主性の主張も共通の基盤の上で

(キッシンジャー構想および安全保障について)

プラントさんは、もし私が日本の総理であれば、まず第一にやることはE.C.との姿勢をちゃんと決めることである。つまり英独仏等主要国とのバイラテラルな関係をやることももちろん大事だけれども、それ以上にE.C.と取り組む姿勢をちゃんとお考えになることが一番大事なことだと思ふ、というようなことを言われておりました。

そういえば、問題のキッシンジャー構想にいたしましても、アメリカとE.C.との間でやっているわけがあります。また安全保障面は、アメリカとN.A.T.O.との間の話合いでやっているわけであつて、個々のメンバーカントリーとアメリカとが渡り合っているわけでは決してないのであります。

なるほどキッシンジャー構想につきまして、フランスが言うこと、イギリスが言うこと、ドイツが言うこととは、それぞれたいへん微妙なニュアンスの相違があるわけでございます。フランスは、アメリカが主導権を握つて、アメリカのヘゲモニーのもとでやるのはちょっとしゃくだと

いっような気持ちが出ております。あるいは中国やソ連に対する配慮が足りないではないかとか、あるいはリッチマンズクラブになって、開発途上国に対する配慮が足りないではないかなどと言う……。じつと聞いていると、どうもフランスはキッシンジャー構想にあまり乗り気でないのではないかというように一見聞こえるわけでありませう。けれども、このフランスはそう言いながら、ECとはこの問題について手堅いネゴシエーションをやっているのではありません。

イギリスは、キッシンジャー大西洋宣言とかなんとかいうようないかめしいことはどうでもいじゃないか、現実には協力の実が上げればたくさんじゃないかという現実論で、あんまりキラキラした構想めいたことはきらいのようでございます。しかしこれとてもECを通じまして、フランスと一緒にアメリカに当たっていることを忘れてはならないと思ひます。

ドイツは、もっともキッシンジャー構想に好意的ではございますが、これとても決定的なこととは言わない。やっぱりEC、NATOを通じてアメリカに当たっているといふことでございます。

いわばEC、NATOの楽屋裏でいろいろな意見を述べているわけで、すべてが表向き議論ではないのでございます。楽屋裏ではいろんな意見があつていいじゃないか、それがむしろ自由社会の強味じゃないか、彼らがこつこつとをいろいろ言っていることによつて、一つのものが

よりこなされたものになっていく。根本の基盤は、やっぱり共通の政治信条を持っていること、ヨーロッパのセキュリティをかためること、これについては、彼らはお互いに揺るぎない信念を持っている。多様な意見がいろいろ出るけれども、そのことにあんまりとらわれてはダメで、ちゃんと彼らは外してはならない軸を握っているというような感じを、私はヨーロッパから受けとるわけでございます。

ただ、一つ言えることは、キッシンジャー構想の中でいろいろなニュアンスの違いはありませんけれども、日本との間では一つ太いパイプでやろうじゃないか。日欧関係のパイプを広くする、太くする、バラエティに富んだものにする。政府間レベルだけでなく、もっとアカデミックなレベルにおいても、あるいはビジネスのレベルにおきまして、あるいは情報、広報のレベルにおきまして、大いに協力していこう。こういう考えがあります。この点につきましては各国とも一致して支持しているようでございます。

しからは、欧州の安全保障問題についてはどういう考え方を持っているかということでございます。これはもうアメリカの参加なくして考えられないということについては、各国とも一致した見方ございました。アメリカは、ワールド・パワーとして、われわれが頼まなくても、ヨーロッパに兵力を維持するであろう。けれども、アメリカでも将来どういう大統領が出るかわから

ないし、議会の構成がどうなるかわからないので、ヨーロッパの安全保障というような点については、究極において欧州自体がちゃんと考えておかなければならない。アメリカのユーロピアン・プレゼンスを考えるについては、それに必要なだけのことではなくて、アメリカとしておかなければならない。そういう点におきましても違った意見、音色が出てくるわけではございません。三国とも同じような考え方を基調に持っているとは感じないのでございます。

(4) これからの日欧関係の在り方

ヨーロッパと日本は大体よく似ております。まず、領土が狭く資源は乏しい。人口はむやみに多いが高度の経済と文明を営んでいる。そのようにたいへん似たような性格を持っているし、したがって似たような問題を持っているわけでございます。いまわれわれが頭を痛めているインフレと物価の問題も、EC各国にも共通の課題でございます。都市問題も大学問題もそうでございます。環境問題もまたそうでございます。全くわれわれが背負っている問題を彼らもまた背負って、困っているということでございます。

そこで、これからの日欧関係でございますが、ECがそういう姿で育ちつつあるということ、そして日欧間でそういう共通性、共通の問題を抱えているという意味におきまして、日欧間の取組み方というのは、日米関係とはもつと違った態様において工夫していかなければならないのではないかと思います。

フラントさんから、今度、混合委員会を作るうじやないかということをご提案されたわけでございます。これは資源政策にいたしましたし、技術政策にいたしましたし、お互いにこれから政府レベルでやり、ゆくゆくは民間人も入れたものにしようじやないかということになったわけでございます。英国におきまして、フランスにおきまして、原子力の問題、石油の問題、その他の資源につきまして、すでに多くのプロジェクトが現に話し合われているわけでございますが、さらに、もっと幅広く協力の場を広げていこうじやないかということが話し合われ、すでにもうその仕事が始まっているわけでございます。わが国といたしまして、このあたりでもう一度ヨーロッパ問題というものをレビューする必要があるものであります。田中総理の訪欧は、古い友人との新しい協力関係を模索するということが任務であつたわけでございますが、そういう意味でよき契機を作っていたいただいたものと思っております。

### 日本とソ連

次に、ソ連でございます。

ソ連との間におきましては、皆さんご案内のように領土問題、漁業問題、経済協力問題、未帰還邦人の帰還問題、喜参問題等たくさん懸案があるわけでございます。

(1) 画期的な総理訪ソ

もともと田中総理の訪ソというのは、国交樹立後十七年もたちまして、最高首脳がその後、直接の接触を持っていないということが不自然だ、ということでもくるんだことでございます。しかし総理がいよいよ乗り込むということになりますと、こういった問題につきまして、国民が何らかの打開のメドをつけるべきだという期待を持つのもこれまた自然のことだと思います。とりわけ領土問題が特に関心を呼んだわけでございます。私ども、お供してまいりますにつきましても、どのように対応すべきかについてずいぶん苦慮してまいったわけでございます。けれども、先方の確たる考えというものを十分掌握する暇もなく、モスクワの土を踏まざるを得ない状況になったのであります。いわば、まあ出たとこ勝負でやるより仕様がないと、腹をくくってとりかかったわけでございます。

ちょうどモスクワ入りの前の日に、中東戦争が起こったわけでございます。これはえらいことになった。首脳会談が流れるかもしれないと思っておりましたが、ブレジネフ、コスイギン、ケロムイコ三首脳がわれわれにかかり切りでやってくれたわけでございますから、まずその懸念はなかつたわけでございます。

田中総理といたしましては、いま申し上げたような懸案を首脳会談の席で洗いざらい持ち出しまして、先方の理解と決断を求められたのでございます。

(2) 領土問題

先方の力点の置き方は、領土ではなくて経済協力であつたと思います。当方の力点の置き方は、経済協力といわんよりは領土問題であつたわけでございます。双方の関心の方向はたしかに違つていたと思います。しかし、領土問題については、大半の時間をさいて露骨ともいえるほどきわめて率直に田中さんが話したわけでございます。

先方の反応は、いやなことを言う、そういうことをいま取り出されたのでは、できるべき話もできなくなるじゃないか。あるいはそういうことはすでにもう決まつた問題で、いま取り出されても困るじゃないかということは一切言わなかつたのであります。むしろ、田中さんがたいへん率直に話をして、齒に衣を着せずにぶつけたということに、一種の好意をもつておられたのではないかという感じ。これは甘いかもしれませぬけれども、そういう感じがいたしました。

というのは、日ソの間の話合いというのは、いまの段階では、あんまり大きなことを期待できないのじゃないかと先方は考えていたと思うのです。このぬくもり具合では、まあ、ついたてをへだてて話をする程度のこと、なかなかフランクな話合いというようなことは必ずしもできる雰囲気ではないと思つていたろうと思ひます。ところが、いきなり田中さんからぶつつけられて、多少意外に思つて聞いたのではないか、しかもそれに対してあんまり悪い感じを持つていなかっ

たのじゃないか。貴方の言われることは理解できるが、この問題は一朝一夕で解決するというような問題ではありませんよ。いわば、これは日ソ関係の友好、信頼関係の進展の中で考えなければならぬ問題である。一口でいって、そういう風情で応酬されていたと思うのでございます。

### (3) 平和条約締結問題

去年十月、私が参りましたときには、双方は平和条約締結の問題につきまして、「双方の立場を述べて意見の交換を遂げた」。そして、「継続してまたやることを決めた」というような表現で共同の新聞発表をやったわけでございます。今度の場合は、「第二次大戦の時から未解決の諸問題を解決して、平和条約を締結することが両国間の眞の善隣友好関係の確立に寄与することを認識し、平和条約の内容に関する諸問題について交渉した」、こういう表現を両方で合意して作り上げたのでございます。『平和条約の内容』というのは、もとよりこれは領土問題が第一でございます。まして、あとは衛星的に若干の事項が加わるかと思えますけれども、「平和条約の内容について交渉した」というのは「意見の交換をした」というものではありません。「交渉をした」という表現をソ連がのんだわけでございます。これは初めてでございます。いままで長く平行線をたどって、凍結に近い状態でございますましたものを、なにか生きた、ネゴシアブル・イシューとしてテ

「ブルに乗せたということ、田中さんのご苦労のおかげであったと私は多といたしております。しかも「来年中には両国の間で交渉する」という時点まで、はっきりと両方で合意をしたわけではございません。」

#### (4) 漁業問題

漁業の点につきましては、安定した漁業を保証しようということ、あるいは長期に安定した漁獲を確保するというような点については、むしろポジティブな立場を先方もとってくれ、理解を示されたわけでございます。今日（十月二十二日）からモスクワで桜内・イシコフ会談が行なわれているわけでございます。これは農林大臣レベルではとてもダメだから、ここでやろうじゃないかと田中さんが食い下がったわけでございますが、ブレジネフさんは、漁業問題は自分はとても弱いんだ。素人がやるより、専門家によく聞いて聞かせてやらそうじゃないかと言われ、そうすることにしたわけです。また長期安定化の問題については、ブレジネフさんは自分も閣僚によく言うし、貴方もよく言っていたので、一つ両者の間で責任を持ってやらそうというようなところで落ち着いたわけでございます。そういう経過からみて、ある程度の前進をわれわれは期待しているわけでございます。

これには、安全操業の水域の問題、安全操業の取締りの問題、それから漁獲量を単年度決定で

なく複数年度に切り替えるという問題、あるいは日ソ両国が協力して漁業資源を維持培養するというような問題、そういうようないろいろな漁業問題を一括して今度の会談で取り上げられる手はずになっているわけでございます。

(5) 経済協力問題

経済協力の問題につきましては、すでにチップ、パルプ、木材、港灣の修改築というような事は現に行なわれているわけでございます。規模はまだ小さなものでございます。

ただいま、若干の大きなプロジェクトが出ていますけれども、今度の首脳会談におきましては、これをどういう筋道で取り上げるかということをお話し合つたのでございます。第一、ソ連も日本との協力を期待し、日本もソ連との協力を希望していることに間違ひはないわけでございます。やり方といたしましては、あくまでも彼我の当事者間で基本契約を結ぶ。基本契約を結ぶにつきましては、十分のフィジビリティ・スタディが必要である、十分の資料の提供が必要である。そして、結ばれたものが満足すべきものであれば政府がそれに政府資金を提供し、あるいはバンク・ローンを与えるにやぶさかではないということでございます。先方は、基本契約段階から政府に踏み込んで干渉を求めたわけでございます。けれども、これはやはり経済体制を異にする国といたしまして、そういうことはできない。あくまで両当事者の間でまず基本契約が

結ばれることが前提でなければならぬと、わが方は主張しました。しかし政府もそんなに冷たくはないんで、フィジビリティ・スタディで民間が調査団を派遣する場合でも、政府がオブザーバーをつけるつもりだ。ただ基本契約自体は両当事者の間でやっていただくかなければならない。それを踏まえたくえで、それが満足すべきものである限りに於いて政府は乗り出す。この筋道は先方もよく理解していただいたと思っております。共同声明にもそのとおり書いてございます。

しかし、その場合に第三国の参加を排除しないということでございます。ソ連は、まず日本との契約をする場合には、当事者は日ソだけにします。もし第三国を日本が入れたければ入れることについてソ連は反対しないが、ソ連と第三国との間に直接契約はしないということでございます。したがって、今後のシベリアに対する協力につきまして、日本が参加するプロジェクトで第三国が参加するような場合は、日本と第三国がまず話をいたしまして、それをソ連はよろしいということになるわけでございます。

これに関連して、田中さんとしては、日本は資源が乏しい国で世界各国でいろいろ工夫をして資源開発に努力している。シベリアについてもソ連の理解が得られればやってもいいんだが、問題はいま申したような筋道に沿ってやらなければいけない。そういうラインで先方との話をいたしたわけでございます。先方といたしましては、シベリアの資源開発は特に日本に頼まなければ

できないわけではない。これはわが国自身もやろうと思ったらできるんだが、日本がそれに興味を示し、希望すれば一緒にやりましょうということになりました。そのようにソ連も相当もったいぶった態度をとってまいりましたが、いずれにいたしましても、シベリアの資源開発ということについては、まず日本と協力してやらなければならぬというような点については、だれが考えてもそうでございますが、ソ連もよく承知していると思うのでございます。

### 活発な首脳外交により、よりよい国際関係を

その他こまかい問題は省かせていただきますが、今度の対ソ交渉を通じて感じましたことは、まずソ連側でも日ソ関係は悪くしてはいけなないと考えていると私は判断いたします。できたらもう少しよくしていきたい、と考えているに間違いはなかるうと判断するわけでございます。しかしこれには相当時間がかかる、相当長期的な目標をやっていかうとしているのではないか。基本的に、日ソ間の信頼関係というものが、もう少しぬくもりを持ってこないと大きな問題を解決するアトモスフェアはできないのではないか。しかしわれわれといたしましては、絶えず懸案の問題を持ち出して、先方の注意を間断なく喚起しておく必要は当然あるのではないかと思うのであ

ります。道はなおけわしいものがあると思いますが、いつまでもたどる平行線ではないと考えるわけでございます。今後の日ソ関係の進展の中で、いろんな懸案がどういう手順で、どの程度ほぐされていくか、これが現実的な道行きではなからうかと考えているわけでございます。

今度の旅行を通じて田中さんは、イギリスからは女王さん、フランスからは大統領、ドイツからは大統領ならびに首相の訪日を要請すると同時に、ソ連からはブレジネフ書記長、ポドゴルヌイ最高会議議長、ならびにコスイギン首相、三人を同時に招待したのであります。そしてそれらの方々から例外なくこころよく快諾していただき、できるだけ早く行きたいというご返事をいただきました。これらをどういう手順で実現してまいるか、来年の春、ポンビドー氏がまずいらつしやるし、再来年の春にはイギリスの女王がいらつしやるでございましょう。その他の首脳の訪日は必ずしも決まっておりますけれども、日本を訪ねたいという気持ちは外交辞令以上のものであることを私は感じたのであります。最高首脳の往来というものが、今後ますます活発になることはたいへん結構なことだと考えております。

十分まとまりませんけれども、一応のご報告を申し上げます。

ご清聴を感謝します。

(昭、四八・一〇・二二 アジア調査会での講演・於帝国ホテル)